The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第24回ワークショップ西洋史・大阪　　報告要旨 ：2019年6月15日大阪大学
Author(s)	
Citation	パブリック・ヒストリー. 2020, 17, p. 102-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第 24 回ワークショップ西洋史・大阪　　報告要旨

2019 年 6 月 15 日　大阪大学

1.　19 世紀後半におけるアジアからの遣欧使節

――岩倉使節団を中心に――

嶽麻美（大阪大学大学院）

本報告では、1871 年に明治政府が派遣した岩倉使節団について、19 世紀後半における世界情勢を踏まえた考察が必要であるという視点から、アジア地域からの欧州視察記録の比較と、公式報告書とされる『特命全権大使米欧回覧実記』第 5 巻「帰港日程」のアジア寄港地での記述に着目し、岩倉使節団再考察の糸口を提示した。

岩倉使節団 (1872-1873 年)、イラン国王ナーセロッディーン・シャー (1873 年)、シャム国王チュラーロンコーン (1897 年) は、訪欧中に軍事関係から文化まで、自国の益となりえると考えるものを広範囲に見学した。岩倉使節団が、政治体制、経済状況、工業化、社会の様相など広く観察しているのに対し、イラン、シャムの国王は君主制に関する事柄に特化していたという差異はあるが、その背景には、非公式帝国性をどのように打破し、近代化を進めるかという問題に直面していたという共通性がみられる。訪欧中の三者の記録には、ヨーロッパとアジアという対立的な記述はほとんど見られないが、岩倉使節団においては、帝国航路での帰路、アジア寄港地での記述内容に変化が見られる。このことは、岩倉使節団の訪欧が日本のその後の方向性を決定づける重要なものであったというこれまでの指摘には考察の余地があり、これまで十分な研究が行われてこなかった「帰港日程」分析の必要性を示唆している。

2.　ローマ都市カルタゴとポエニ戦争の記憶

――ゴルディアヌス 1 世「反乱」描写を中心に――

井福剛（同志社大学非常勤講師）

カルタゴの記憶の研究は長い間、西洋古典の分野で扱われてきた。そうした研究では、ローマの著作においてカルタゴは残酷で、傲慢で、不誠実な姿で描かれたと指摘されている。しかし、こうした西洋古典を中心とした先行研究では、テクスト内部のカルタゴ描写に議論が集中しており、歴史的コンテクストとの関連は不明瞭である。また、ローマ都市として再建されて以降の記憶についてはほとんど扱われてこなかった。

そこで本報告では、まず再建されたカルタゴに関する言説を分析した。カルタゴはローマ帝国の Concordia（調和）をあたかも体現するかのような都市として再建されると同時に、そこにはポエニ期カルタゴにまつわる記憶として Discordia（不調和）がつきまとっていたことを指摘した。

次に『ローマ皇帝群像』におけるゴルディアヌス 1 世描写について考察をおこなった。ゴルディアヌス 1 世「反乱」時の描写において、ローマ都市カルタゴは皇帝にふさわしい理想のローマ都市として描かれると同時に、ポエニ戦争時の敵対者カルタゴの記憶を想起させるものとしても描写されている。『ローマ皇帝群像』が執筆されたと考えられる古代末期においても、かつてのカルタゴとの敵対の記憶は同じ場で同じ名をもつがゆえに、ローマ都市カルタゴに刻み込まれており、ローマの「危機」の描写の際に、その記憶が先例として想起される可能性が常に秘められていたことを主張した。

3.　ヘンリー 4 世の対貴族政策

――ヨーク公エドワードを事例として――

飯尾圭司 (名古屋大学大学院)

ヘンリー 4 世 (在位：1399-1413) はリチャード 2 世 (在位：1377-1399) を廃位してランカスター王朝を創設した。王位簒奪によって即位した彼にとって、有力貴族との関係は重要な課題の一つであった。ヘンリー 4 世期の貴族に関係する政治史的観点からの研究においては、イングランド北部辺境地域の有力家系であるパーシー家が多くの関心を集めてきたが、他の貴族家系についての研究が十分になされているとはいいがたい。こうした研究動向を踏まえ、本報告ではヨーク家の有力貴族ヨーク公エドワード (c.1373-1415) に目を向けた。彼はリチャード 2 世の寵臣であり、彼の治世下で多くの利益を享受していた。それゆえ、ヘンリー 4 世にとってヨーク公エドワードは警戒すべき人物であったと推察される。本報告では、ヨーク公エドワードに対して発給された開封書状 (Letters Patent) の分析、そして他の貴族に与えられた開封書状との比較を通じて、ヨーク公エドワードに対するヘンリー 4 世の政策を、恩顧の分配という観点から検討した。考察の結果、ヘンリー 4 世の敵対貴族に対する政策は、惜しみない恩顧を分配することによって自身の統治に取り込むものではなかったことが示された。むしろ、辺境地域の官職に任命することにより、王権への忠誠と奉仕を求めたのであった。また同時に、ヘンリー 4 世は、封のかたちでの権利付与を控えることによって、貴族が地域的な勢力基盤を築くことを妨げ、ランカスター家の優位性の確保を図った。

4.　1980 年代の東ドイツにおける請願

――環境汚染による健康問題を中心に――

藤原星汰（広島大学大学院）

請願とは、東ドイツの人びとが、支配政党 SED（社会主義統一党）や政府機関、国家機関等に送った手紙のことである。この請願を用いて住民たちは、政策に対する苦情あるいは提案

を政府に向けて示し、彼らが日々抱える問題を解決しようとしていた。

今回報告者は、1980 年代の住民請願を分析した。その際、事例として用いたのは、当時深刻な社会問題であった環境汚染による住民の健康問題に関するものである。

1980 年代の東ドイツは、従来の研究では、経済停滞、ソ連のゴルバチョフの改革による社会主義体制の動揺といった出来事に代表されるように、SED が多くの問題を抱え、最終的に 89 年の体制崩壊に至る時代と認識されている。この時代の請願制度は、そうした背景から、機能不全に陥り、住民にとってはもはや意味をなさない存在であったと理解された。

しかし、この時代の請願を分析してみると、人びとは、体制崩壊直前まで請願を用いて国家と積極的に交渉を展開し、彼らが日々抱えた問題を解決しようとしていた。すると請願は、1980 年代においてもなお、東ドイツの人びとにとっての重要な問題解決のための手段であったように見える。

5.　公共空間における「アーカイブ」の活用に関する一考察

――コミュニティ・アーカイブと専門職の役割――

清原和之（九州大学大学院）

本報告では、歴史学の素材となるアーカイブズ資料が、現代社会のなかでどのように生み出され、意味づけられているかという問題を、コミュニティ・アーカイブに焦点を当てて論じ、コミュニティによるアーカイブの活用を公共空間のなかに位置づけるとき、何が問われることとなるのか、課題となる論点を提示した。

事例として、イギリス・ロンドンの地域再生事業に反対するアクティビストによるコミュニティ・アーカイブと、アメリカのオキュパイ運動におけるコミュニティ・アーカイブの 2 つを採り上げて紹介した。これらの事例では、コミュニティ自身によってアーカイブが構築され、彼らの目的を達成するための活用に重点が置かれ、アーカイブを将来に遺すことは主要な目的とはみなされない傾向にあった。しかし、当事者以外の他者にとっては、現代社会の一側面を示す有用な価値を持つものともなりえよう。それでは、コミュニティ・アーカイブを社会のなかで保持していくとすれば、それは誰によって、いかなる目的と負担のもとで保持されるのであろうか。また、この点と関連して、専門職としてのアーキビストはコミュニティ・アーカイブにいかに関与すべきか、という論点がある。アーキビストにはコミュニティの自律性を尊重した支援のあり方が求められるが、同時に、コミュニティにとってのアーカイブの価値を公共に開いていくこともまた、専門職の役割として求められるのではないか。社会のなかで遺されるべき資料とは何かという問題を、多様なアクター間で議論していくことが求められている。

6. 'Hidden Seamen' From East Africa: Somali Firemen and European Steamships, 1880s-1930s

Gerold Krozewski (Osaka University)

Between the late nineteenth century and the Second World War the worldwide commerce carried out by British, French, and German steamship companies relied heavily on so-called coloured seamen. The subject has received particular attention with regard to Indian lascars. The presentation focused on the little-known story of Somali seamen from Northeast Africa on European steamships, and their voyages, recruitment, and agency in the maritime labour market. Somalis worked virtually exclusively in the engine rooms of steamships as firemen and coal trimmers. As a particular ethnic category in the labour market Somalis were subject to stigmatization. The French *Messageries Maritimes* discriminated against Somalis and pursued a policy of recruiting firemen from Yemen for the port of Djibouti. In British shipping, Somali seamen became associated with a specific segment of labour in tramp shipping. In this sector, Somali firemen operated as individuals rather than bound by ethnicity. They worked in ethnically diverse engine crews on routes from Britain through the Suez Canal to South and Southeast Asia and across the Atlantic to North and South America. The case serves as an example for the ethnic structuring of a globalizing labour market but also shows how workers transcended ethnic categories.

7. From Port to Court Jew: Pedro de Baeça's Life, Writings, and Legacy, 1555-1614

George Bryan Souza (University of Texas at San Antonio)

This presentation deals with the life, writings and legacy of Pedro de Baeça, a prominent early modern Portuguese New Christian merchant of Sephardi descent that was an astute observer of long-distance commerce and finance and a precocious author on political economy. His commercial and administrative activities spanned the globe and ranged from acting on his own account, in association with other familial and extended relations and relationships and on behalf of Spain's imperial interests. He was, by virtue of his intimate knowledge of long-distance commercial practices, an active participant in the construction of an emerging global economy. Despite the fact that he and his work are known, there are crucially important reasons for this research. The first is: we do not yet have a complete biography or entirely satisfactory discussion of his life and career and/or the entire corpus of his writings. The second is much more complex, ambitious, and exploratory. I will utilize and interweave my findings about his life and writings in order to briefly discuss the importance of his New Christian identity, Sephardi descent, and his legacy and involvement in the historiography of Sephardic studies and the early modern empires of Spain and Portugal in Asia.